TOKYO BAPTIST CHURCH 東京バプテスト教会
Weekend Message
週末メッセージが聞けます http://tokyobaptist.org/sermons/

エペソ人への手紙 - 恵みのスペクトラム- 闇からの招き
エフェソの信徒への手紙 5 章 1 節-8節

2026 年 8 月 1 日 & 2 日
ジェシー・セザリオ 牧師

皆さんこんにちは。父なる神さまと主イエス・キリストの恵みと平安が、皆さんとともにありますように。

序論

今日の聖書箇所を見る前に、パウロがこれまで「どのように歩むべきか」について語ってきたことを少し振り返ってみましょう。これから見るように、エフェソの信徒への手紙 5 章 2 節でも、パウロは再び「どのように歩むべきか」を教えています。ここでいう「歩む」とは、私たちがどのように人生を生きるかを表しています。パウロはこのテーマをエフェソの信徒への手紙/4 章 1 節で次のように始めました。「ですから、主の囚人である私は、あなたがたに勧めます。招かれたあなたがたは、その招きにふさわしく歩み、」また、その数エフェソの信徒への手紙 4 章 17 節-18 節でそのように歩んではいけないかについて語っています。「[17]… あなたがたはもはや、異邦人が空しい考えで歩んでいるように歩んではなりません。[18]彼らの知性は闇に閉ざされ… 」

パウロはエフェソ人への手紙の中で、どのように歩むかについて5回触れています。今日私たちはその「歩み」の山頂にたどり着きます。パウロがエフェソの信徒への手紙 4 章 1 節で語り始めた、どこをどのように歩くかというその教えの頂点にたどり着きました。それでは、私たちが受けた召しにふさわしく歩むとは、どのようなことなのかを見ていきましょう。

その前に、祈りましょう。

エフェソの信徒への手紙 05 章 1-2 節「[1]ですから、神に愛された子どもとして、神に倣う者となり、[2]愛の内に歩みなさい。キリストも私たちを愛して、ご自分を宥めの香りの供え物、また、いけにえとして、私たちのために神に献げてくださったのです。」

親として、そしてここにいる多くの親御さんも同じように思われる方も多いと思いますが、子どもの成長における二つの大きな節目は、歩き始めることと話し始めることです。これは決して偶然ではないと信じていますが、パウロはここで、「歩むこと」と「語ること」、そして「神の子どもであること」を結びつけようとしているのです。つまり、私たちの歩みも、私たちのことばも、天の父なる神に似たものであるべきだということです。

ここでも、私たちが見てきた“霊的な可塑性(Spiritual Plasticity)”が、自然界とは逆の順序で働いています。

クリスチャンはすでにキリストの思考を持っているので、今度は、その考え方に私たちのからだと行動が追いついていく必要があるのです。そのために、パウロはここで私たちに「神に倣う者となりなさい」と命じています。現代の命令的な意味として、これはライフスタイルです。そのように生きるために、私たちは愛のうちを歩むよう教えられています。その愛を実践するために、パウロは完全な愛がどのようなものかを思い起こさせてくれます。イエス・キリストの犠牲です。ここを見ると、キリストご自身がご自分をささげられたと書かれています。しばしば私たちは、父親がどうして自分の息子を犠牲にすることができたのか、という疑問に直面します。しかし、この箇所にあるように、イエスご自身が自ら望んでご自分の命を捧げられたのです。イエスはヨハネによる福音書 10 章 15 節, 17 節-18 節でこう言われました。「[15]…私は羊のために命を捨てる。[17]私は命を再び受けるために、捨てる。それゆえ、父は私を愛してくださる。[18] 誰も私から命を取り去ることはできない。私は自分でそれを捨てる。私は命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、私が父から受けた戒めである。」

思い出してください。イエスは、ご自分の思いを成し遂げるためではなく、ご自分を遣わされた父なる神の御心を行うために来られました。

従順であるためには、二つの違う意志が必要です。

一つは、あなたに行って欲しいと願う人の意志。そして、それに従い行うあなたの意志です。キリストは、ご自分の意志の力をもって望んで父なる神の御心を行い、完全な従順を成し遂げられたのです。キリストはその杯が過ぎ去ることを願われましたが、しかし、ご自分の意志とご自身を捧げることによって成し遂げました。

私が大阪で英語教師兼宣教師をしていた時、学期の最後はゲームの日にしました。英語で当てっこゲームやカードゲームなどをして楽しんでいました。あるとき、YouTube で見たゲームを取り入れようと思いました。ティッシュの箱からティッシュを一枚ずつ取り出し、最初に最後の一枚に到達した人が勝ち、というゲームです。そこで、8 人ほどの子どもたちに挑戦してもらいました。子どもたちを一列に並ばせて「ティッシュを一枚ずつ取り出して、英語で数を数えてね。」と言いました。つまり、一箱につき約 200 枚を英語で数えなければなりませんでした。子どもたちは夢中になって始めました。ティッシュはまるで冬景色の雪のように教室中を舞い、あちこちに散らばっていました。ゲームが終わると、日本人の先生がティッシュを拾い始めましたが、彼女はゴミ箱に捨てるのではなく、買い物袋に入れていたのです。私は先生に尋ねました。「何をしているんですか？」すると先生は、「なんてもったいない！私が使います。」と言って、ゲームで使ったティッシュ約 1,600 枚を、4 袋ほどの買い物袋に拾い集めました。

今は、私も三人の子どもの父親になったので、その気持ちがよく分かります。我が家では、ティッシュの箱があっという間になくなってしまいます。でも、皆さんに少し想像していただきたいのです。子どもたちが触り、床に投げられ、拾い集められて買い物袋に入れられた、あの使用済みのティッシュの価値。それと比べて、イエス・キリストの価値はどれほど違うでしょうか。イエスは、父なる神さまによって高く引き上げられたお方です。神さまは、すべての名にまさる名をイエスにお与えになりました。それは、天にあるものも、地にあるものも、地の下にあるものも、すべての膝がイエスの御名の前にひざまずき、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神さまの栄光をたたえるためです。

そして、この栄光と完全さを持ったお方こそ、ご自身を犠牲としてささげられたお方なのです。キリストの犠牲によって、神さまとの契約を保つために、もはや誰も犠牲をささげ続ける必要はなくなりました。だからこそイエスは、神さまにささげられた「宥めの香り」となられたのです。犠牲の小羊として、ご自身を傷のない完全ないけにえとしてささげることによって、旧約の契約を完成されました。それは、人類の罪、そして世の罪のための完全ないけにえでした。このことこそ「もったいない」のです。今までの歴史上、そしてこれからの将来、後にも先にもこれ以上にすぐれた犠牲はありません。そして、それこそが私たちにとっての福音です。なぜなら、「すべては成し遂げられた」からです。

パウロは私たちに、「愛のうちを歩みなさい」と命じています。この言葉には二つの意味があります。

一つは、キリストのようになることで、人を愛しながら歩むことです。そしてもう一つは、キリストの愛のうちを歩むことです。しかしその両方ではいけないでしょうか。

ヨハネの手紙一 4章19節「私たちが愛するのは、神がまず私たちを愛してくださったからです。」これこそが、私たちが歩むべき歩みです。そしてここからパウロは、どのように神の小羊を真似て汚れないものとなるのか、その具体的な適用を示しています。

エフェソの信徒への手紙 05章3節-5節「[3]聖なる者にふさわしく、あなたがたの間では、淫らなことも、どんな汚れたことも、貪欲なことも、口にしてはなりません。[4]恥ずべきこと、愚かな話、下品な冗談もふさわしくありません。むしろ、感謝の言葉を口にしなさい。[5]すべて淫らな者、汚れた者、貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまえなさい。」

3節でパウロは、あらゆる性的な不品行について、結婚前も、結婚外も、結婚生活の中で許されていると考えられていたようなことについても、一切の余地を与えませんでした。何故ならエペソの人々は豊穣の女神アルテミスを礼拝していたからです。当時は、男性たちが神殿で行われる偶像礼拝に参加することは一般的で法律上も認められていて、そこにはしばしば性的に不道徳な行為が含まれていました。パウロはたとえそれが当時の社会では当たり前のことであったとしても、神の前では決して受け入れられるものではないと、彼らに思い起こさせています。それどころかパウロは、そのような性的な行いについて話すことさえ避けなさいと警告しています。おそらく、そうしたことを続けている人を実際に見たり、そういう人を知っていたりする人もいたのでしょう。しかしパウロは、そのようなことを話題にしたり、誇ったりすることさえもしてはならないと言っています。そしてパウロは、私たちに話す内容について考えるよう求めています。ここでは、愚かで神さまを敬わない話や、下品な冗談について、クリスチャンの間では語られるべきではありません。おそらくパウロが言おうとしているのは、神殿で行われていた性的に不道徳な行為について語ることも、それを冗談のネタにすることさえも避けるべきだ、ということです。パウロは、そのような汚れたものに関わることを美化したり、面白おかしく語ったりしてはならない、それは捨てるべきものであると。そして、その代わりに身に着けるべきものとして、感謝を挙げています。

では、ここで私たちへの適用を考えてみましょう。これはここにいる全員に当てはまるわけではないかもしれませんが、お聞きします。皆さんの思いは、どれほど清いでしょうか？男性の皆さんの会話は、どれほど清いでしょうか？そして女性の皆さんも、どうでしょうか？以前もお話ししましたが、ポルノは今まで以上に急速に広がっています。そしてポルノは、悪魔的な礼拝の一つの形でもあります。クリックするだけでも、その汚れた帝国を支えることになるのです。あなたが視聴することで、若い女性たちの搾取に資金が流れ、性感染症への感染、精神的なうつ、中絶、児童人身売買、そして彼女たちの人生と将来が壊されていくことを支えることになってしまいます。そして女性の皆さん。ポルノも増えていますが、それと同時に、恋愛ファンタジー小説や、そのような内容の映画も年々増え続けています。私たちが気をつけなければならないのは、音楽であれ、動画であれ、どのようなコンテンツであれ、不道徳な性的行為を美化するものすべてです。

御言葉は、そのようなものから離れなさい、できるだけ遠ざかりなさい、と私たちに警告しています。

そして、私たちの思いが向けられるべきものは、イエスによって与えられた恵みに対する感謝です。感謝は神に対しても人に対しても語られるべきです。

皆さんは、自分が受けたものに心から感謝しているでしょうか。

私がこれまで見てきた中で感じるのは、人々が互いに感謝するとき、心と口の間につながりが無いということです。「リップサービス」興味深いことに、これは日本ではとても一般的なことでもあります。日本の文化では、「建前」が当たり前になっています。もちろん、ビジネスの場では礼儀正しく振る舞う必要がありますし、それは適切なことです。

問題なのは、その口先だけの感謝や建前が習慣となり、夫や妻に対して、子どもに対して、家族や友人に対して、さらには教会でさえも、そのように話すようになってしまうことです。家庭でも教会でも、私たちに必要なのは心のこもっていない「ありがとう」ではなく、そして、神さまもそのような感謝を望んではおられません。皆さんの神への祈りもそのようになっていないことを願っています。すると、皆さんはこう思うかもしれません。では、どうすれば本当に感謝する心が持てるのか？

コリントの信徒への手紙二 4章15節「すべてのことはあなたがたのためであり、こうして、恵みがますます多くの人に及んで、感謝を満ち溢れさせ、神の栄光となるのです。」

恵みとは、ただ受け取るだけのものではありません。また、ただ実践として人に与えるだけのものでもありません。イエスによって私たちが受けた恵みは、畏怖の念を持って、完全なる畏怖を持って私たちは見つめるべきです。私は人々が自分に与えられた恵みについて理解していないことが原因なのではないかと思います。皆さんは、キリストにあって自分に与えられた恵みを、本当に理解しているでしょうか。

エフェソの信徒への手紙 5章6節-7節「[6]空しい言葉にだまされてはなりません。これらの行いのゆえに、神の怒りは不従順の子らに下るのです。[7]ですから、彼らの仲間になってはなりません。」

ここで「空しい言葉」で人々を惑わしていた教師たちが誰なのかは、はっきりとは書かれていません。しかし、パウロの警告はとても明確です。クリスチャンだと言いながら、性的に露骨なことや性的に不道徳なことを「問題ない」と教える人たちと関わってはならないということです。それが露骨なポルノであっても、あるいは、もっと巧妙で目立たない内容であっても同じです。

以前にもお話ししましたが、ポルノは映画やテレビ番組、ミュージックビデオ、マンガ、アニメ、ビデオゲーム、YouTubeなど、私たちの身の回りのあらゆるものに入り込んできています。皆さんには見分ける力が必要で、そして、そのようなゴミを自分の人生に入り込ませないよう、行動することが必要です。パウロは、そのようなことを行い続ける者たちに対して、神さまの御怒りが下ると警告しています。しかし、ここでパウロが伝えようとしていることは、もう一つあります。それは、“シンクレティズム（宗教混合主義）”の人たち、ここでは特に、キリスト教の信仰に別のものを混ぜ合わせる教師たちに気を付けなさいと指摘しています。そのような人たちは、福音に何かを付け加えて教えます。そして、それが何であるかは問題ではありません。異教の儀式であっても、律法でも、あるいは善い行いであっても同じです。純粋な真実は、イエス・キリストに何かを付け加えたら無意味と言うことです。皆さんが誰かから教えを受けるとき、これを判断基準にすべきです。パウロが警告している教師たちは、エペソの教会の中に異教の慣習を持ち込んでいました。言い換えれば、キリストによって与えられた自由を都合よく利用し、当時の性的・社会的な慣習を続けながら、キリストによる贖いを受けられるとしていたのです。

パウロは、この誤った教えを完全に否定し、そのような生き方を続ける者たちには、神の怒りが確実に下ると警告しています。また別の種類の誤った教えは、神の怒りを用いてクリスチャンに良い行いをさせようとする教えです。ここでパウロが語っているのは、そのようなことではありません。この箇所によれば、神さまの御怒りは誰に向けられているのでしょうか。すべての人に、でしょうか？いいえ、怒りが下るのは、不従順の子らにです。

ここで注目していただきたいのは、パウロがクリスチャンと「不従順の子ら」とをはっきり区別していることです。この後の8節でパウロは、「あなたがたは以前は闇でした…」と言います。つまり、彼らがこれから闇になるということではなく、もはや闇ではないということです。そして、もはや闇ではないので、今もなお闇の中にいる人たちの行いに加わるべきでは

ありません。ここで「べき」という言葉はとても重要で、義務づけているわけではありません。思い出してください。これは、**エフェソの信徒への手紙 2 章 8 節 – 9 節**で語られています、**「あなたがたは恵みにより、信仰を通して救われたのです。それは、あなたがたの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるのではありません。それは、誰も誇ることがないためです。」**

だからこそパウロは、イエスは神さまへの「宥めの香り」となられたと言ったのです。イエスは傷のない完全な犠牲の小羊です。ユダヤ人の最初のクリスチャン達はイエスこそが、罪を永久に取り除き、いけにえの制度を終わらせた、ただ一つの完全ないけにえであることを理解していました。しかし、それはユダヤ人だけのためではなく、世の罪のためでもあったのです。十字架において、罪そのものが打ち破られました。それゆえ、救われるために従わなければならないシステムは無く、あなたが救いを失うことも絶対にあり得ないのです。だからこそ、**エフェソの信徒への手紙 2 章 8 節 – 9 節**が教えているように、救いは信仰によって、ただ信仰を通して与えられるのです。ところで…「じゃあ 10 節はどうなるの？」と思う方もいるかもしれません。**「[10] 私たちは神の作品であって、神が前もって準備してくださった善い行いのために、キリスト・イエスにあって造られたからです。それは、私たちが善い行いをして歩むためです。」**これは義務ではありません。**ローマの信徒への手紙 8 章 38 節 – 39 節**で、パウロが何と言っているか見てみましょう。**「[38] 私は確信しています。死も命も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、[39] 高いものも深いものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すことはできないのです。」**
つまり、神の怒りはイエス・キリストを信じない者たちだけに備えられているのです。**ヨハネによる福音書 3 章 36 節「御子を信じる人は永遠の命を得る。しかし、御子に従わない者は、命を見ることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。」**
新約聖書には、神を信じながら罪を犯す人に対する懲らしめについて語られている箇所が、少なくとも9か所あります。懲らしめと怒りは同じものではありません。もしクリスチャンが闇の行いに加わるなら、その人は主の懲らしめを受けます。またその罪が教会の中で明らかになった場合には教会としての訓練が行われるべきです。では、罪の中を歩み続けているクリスチャンは、どうすればよいのでしょうか。罪の中で生きていたら、主の指導訓練を経験するのか、または困難を経験するのでしょうか？もしかすると今、あなたは何らかの苦しみの中にいるかもしれません。または、次々と道が閉ざされているように感じるかもしれません。主が自分にして欲しいと願っておられることが、どうしても前に進まないと感じているかもしれません。

その答えは、悔い改めることです。父なる神さまがそう語られ、イエスもまたこのように言われました。
ヨハネの黙示録 3 章 19 節「私は愛する者を責め、鍛錬する。それゆえ、熱心であれ。そして悔い改めよ。」皆さんの人生の中に、主に喜ばれないものはありませんか？あるいは、神さまに従うことを妨げている何かを、手放せずに握りしめてはいないでしょうか？今の状況が心地よすぎて神さまのために一歩踏み出すことを妨げているものはありますか？神さまのもとへ立ち返り、悔い改めましょう。クリスチャンである皆さんの内側では、肉と霊が戦っています。問題はあなたが悔い改めることができるかどうかではありません。問題はイエスのように、自分の意志を神の御心に従わせられるかどうかです。

ローマの信徒への手紙 6 章 10 節 – 14 節には、このように書かれています。**「[10] キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。[11] このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きている者だと考えなさい。[12] ですから、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。[13] また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に献げてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生かされた者として神に献げ、自分の五体を義のための道具として神に献げなさい。[14] 罪があなたがたを支配することはありません。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるからです。」**

これこそが、パウロが語っている「歩み」です。また、**ガラテヤの信徒への手紙 5 章 16 節**でパウロはこう言っています。**「私は言います。霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。」**
私たちが、神が私たちを愛してくださったその愛の内を歩み、そして自分が受けたその愛を人々にも分かち合うとき、私たちは真のイエスに倣う者となることができます。皆さんも、神を愛することにおいても、神が皆さんの人生に置いてくださった人々を愛することにおいても、キリストに倣う者となりたいと思いませんか。これが愛のうちを歩むということです。それこそが、キリストに倣う者となる歩みなのです。

エフェソの信徒への手紙 5 章 8「あなたがたは、以前は闇でしたが、今は主にあって光となっています。光の子として歩みなさい。」
私たちがイエスを知る前の状態は、闇でした。「闇の中にいた」とは書かれていません。私たち自身が闇だったと書かれているのです。
先ほど私は、「キリストにあって与えられた恵みを本当に理解していますか。」とお聞きしたのを覚えていますか。
イザヤ書 64 章 6 節には、このように書かれています。**「あなたの名を呼ぶ者も　奮い立ってあなたにすがる者もおりません。あなたは私たちから御顔を隠し　私たちを罪の力に渡されました。」**

私は先ほど、床に散らばっていたティッシュの話をしました。あの話を思い返すと、自分自身がまるで鼻をかんだ後の使用済みのティッシュのようだったと思うのです。それが私でした。救われる前の自分がどのような人生を送っていたかを知っています。私の行いは、義と呼べるようなものではまったくありませんでした。それほどひどい状態だったのです。皆さんも、ひどい風邪をひいて鼻水が止まらなかった経験はありませんか。一日の終わりには、濡れて汚れた使用済みのティッシュが袋いっぱいになってしまうといった経験はありませんか？

想像してみてください。道で見知らぬ人が近づいてきて、少し怪しげな様子で、大きな買い物袋を四つ手渡してきます。受け取って中を見てみると、そこには鼻をかんだ後の使用済みのティッシュがぎっしり入っています。しかも、それは非常に強い感染力を持ち、「罪」というウイルスで世界中を感染させてしまうほど危険なものだったとしたら、皆さんはどうするでしょうか。私なら、理性的な人なら誰でもするように、跡形もなく焼き尽くしてしまうでしょう。それが、神さまの怒りです。そしてそれは、私たちへのものです。
しかし、**イザヤ書 53 章 6 節**にはこう書かれています。**「私たちは皆、羊の群れのようにさまよい　それぞれ自らの道に向かって行った。 その私たちすべての過ちを　主は彼に負わせられた。」**

これこそが、神さまの恵みです。しかし神さまは、私たちの罪を洗い清めてくださるだけではありません。それ以上のことを約束してくださいました。神さまは、新しくされた世界と、新しくされたからだを受け継ぐという相続を約束してくださったのです。そこでは、苦しむことも、病気になることも、朽ちることもありません。私たちは主がいつも共にいてくださることで、豊かな人生を送ることができます。

これこそが、驚くべき神の恵みです。ここでもう一つ、この箇所でぜひ見ていただきたいことがあります。ここまでパウロは、性的な罪について教えてきました。そして、この点において神さまに喜ばれる唯一のあり方は、夫と妻との間にある性的な関係です。

エペソ人への手紙 5 章の後半になると、パウロはこの話をさらに発展させ、結婚とは、キリストと教会との関係を映し出すものであると教えます。それは、今だけでなく将来にまで続く、信仰の結びつきなのです。
もし、この地上で神さまを知らない人々の歩み、すなわち神さまが喜ばれる結婚に反するようなことに加わらないことが「脱ぎ捨てるべきこと」だとするなら、「身に着けるべきこと」は、この地上で神さまが喜ばれる結婚を求め生きることです。
思い出してください。パウロはこの手紙の最後で、信仰の戦いについて語ります。そして、そのことを第 5 章ですでに築き始めています。皆さんに見逃さないでいただきたいポイントは、皆さんの家庭や結婚生活そのものが、光と闇との信仰の戦いの一部であるということです。
そして、独身の男性も女性も、この信仰の戦いとは無関係ではありません。
なぜなら、ポルノや性的な汚れは、悪魔が皆さんの将来の結婚を壊そうとする手段だからです。また、独身として歩むよう神さまに召されている人に対しても、悪魔はそのようなものを用いて、クリスチャンとの交わりを壊そうとします。
それは、皆さん自身を汚染し、皆さんの考え方をも汚染します。そして、将来の夫や妻との関係、友人との関係、家族との関係、教会での関係にまで影響を及ぼしていきます。

信仰の戦いは現実のものです。それは、目に見えない霊の世界だけで起こっているのではありません。今、私たちが生きているこの現実の世界においても、実際に起こっているのです。

イエスはこのように言われました。ヨハネによる福音書 8 章 12 節
「私は世の光である。私に従う者は闇の中を歩まず、命の光を持つ。」

皆さんは、光の中を歩みたいですか？イエスは皆さんを、ご自分と共に光の中を歩むよう招いておられます。キリストの愛に包まれ、その愛が皆さんを通して現わされるように。

ローマの信徒への手紙 13 章 12 節「だから、闇の行いを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けましょう。」
キリストを信頼し悔い改めるなら、皆さんは光の中を歩むだけではなく、主が皆さんを守ってくださいます。そしてそれらに打ち勝つための、聖霊の力が与えられます。

ヨハネの手紙一 4 章 4 節には、このように書かれています。
「子たちよ、あなたがたは神から出た者であり、彼らに勝ちました。あなたがたの内におられる方は、世にいる者より大いなる者だからです。」

神さまを信頼しましょう。

指定のない限り聖書は協会共同訳を使用しています。
聖書　協会共同訳: ©日本聖書協会
Japan Bible Society, Tokyo 2018

キリストのことをもっと知りたい
洗礼を受けたいという方はこちら
メール：cc@tokyobaptist.org
もしくは：https://t-b-c.us/cc

TBC Life 申込み
（毎週届くメールニュース）
http://t-b-c.us/tbclife

スモールグループ参加申込み

http://t-b-c.us/sgsu

オンライン献金

http://t-b-c.us/give

SG レッスンの PDF

https://gotbc.org/sg3126jp

TBC カレンダー
（TBC のスケジュールが確認できます）
https://tokyobaptist.org/calendar

★クラス 101
教会員になるためのクラス
9 月 6 日(日)1:00 pm ～ 5:00 pm
場所: ランゲホール(B1)
参加条件: どなたでも

★クラス 201
クリスチャンとして成長するために
9 月 20(日)1:00pm – 5:00pm
場所: ランゲホール(B1)
参加条件: クラス 101 を修了したメンバーの方

全クラス申し込み:
https://t-b-c.us/classes